ボランティア活動についての一考察
－本校の学校紹介、情報発信から－

鳴門市北灘中学校　教諭　　松　浦　和　也

(1)　はじめに

昨年6月、本校はノースカロライナ州より、Ms. Lois Petrovich-mwaniki, Ms. Lisa Ann Greene, Ms. Cynthia Milesの3名の先生方を受け入れ、授業を見学していただき、生徒との交流会をもったりした。特に、Ms. Greene, Ms. Milesの両先生方は日本の文化に深い興味を示し、本校との交流を強く希望され、電子メールのアドレスなどを交換し、学校、もしくはクラス単位で交流をもつことを約束することになった。その後、11月になり、Ms. Greeneとのメールの交換が始まり、生徒間でメールや自己紹介文を航空便で送るなど、交流が始まった。交流がすすむ中で、グローバル・パートナーシップ・プロジェクトに参加する機会がわたしに与えられ、彼女は是非わたしが彼女の学校(Flat Rock Middle School) を訪問することを希望し、そこで日本の文化について紹介して欲しいということになった。わたし自身、今後交流を深める中で、彼女の学校がどのようなものであるかということを知ることはとても大切であると認識し、アメリカの学校の授業はどのようなものであるかということにも興味があった。今回のプロジェクトの参加によって、本校とFlat Rock MSの交流が深まり、また、アメリカの学校の授業を見ることによって自分のこれからの授業への考え方が深まることを期待し、このプロジェクトへの参加を決意した。参加に際して、自分の学校を紹介するとともに、相手校と今後どのような交流を深めていくべきかについて考えようと思った。本校の取り組みでも特に顕著なボランティア活動について情報発信をし、相手校の反応を見、お互いの学校で何かボランティア活動を通じて交流ができるようにと考えた。

(2)　研究の概要

①　研究をすすめるあたって

本校の学校紹介の中で宅配弁当作りについて説明した。プレゼンテーションソフトがうまく使えなかったこともあり、口頭での説明が多かったが、大変興味をもってくれた。そこで、本校のボランティア活動とFlat Rock Middle School、また近隣のRugby Middle Schoolのボランティア活動を紹介し、そこから共通点や相違点を考察してみたい。そして、これから本校がボランティア活動をすすめるにあたって生かせる部分はあるかなどについて考えてみることにした。ただ、現地調査中には詳しく情報収集ができなかったこともあり、不明な点については後日電子メールにて得た情報にて補うことにした。

②　本校のボランティア活動

(a)　自分で見つけるボランティア活動

本校では3年前から「自分で見つけるボランティア活動」を行っている。これは夏、冬、春休みの長期休業中に生徒が自分たちで活動人数、活動場所、活動内容などの計画を立て、自らすすんで行うというボランティア活動である。

主な生徒の活動内容は3つある。一つは地域の清掃活動である。本校区は東西に長く、国道が通っている。道路沿いにはたくさんのゴミがあり、それを拾うのである。また、校区内の3漁港の周辺、海岸の清掃も行っている。二つ目は校区内にある保育園での活動である。園児に本を読み聞かせたり、遊んだり、園周辺の清掃を行っている。三つ目は保育園と併設している老人福祉施設への訪問である。今年の夏には老人に藍染めを教えるという活動を行った。これは本校が鳴門教育大学と協力して、フレンドシップセミナーという活動に取り組んだ後の発展の活動である。フレンドシップセミナーは鳴門教育大の教授、生徒を本校に招き、彼らから藍染めを教わり、実習を行うもので、この活動は今年で2年目になる。機材、材料すべてを大学側が負担してくれ、理科教育の一環として行っている。せっかく教えていただいた知識を生かせないかと言うことで、地域の老人に藍染めをしてもらおうと考えたのである。もちろん福祉施設訪問の際にも鳴門教育大学に協力をいただいている。

(b)　宅配弁当サービス

町内に住む独居老人に弁当を作り、それを宅配するというのが宅配弁当サービスである。これは地元婦人

会の人と協力して行っている。弁当と一緒にメッセージカードをつけ、地元民生委員の方と一緒に独居老人宅を一軒一軒回るのである。この活動後も暑中見舞いや年賀状を出すなどの活動もしている。

(c) 世界の被災地への義援金募金活動

② Flat Rock Middle Schoolのボランティア活動

(d) 教会でのボランティア活動

学校全体としての取り組みはまだ行っていないが、数人の生徒は夏休み中に地元の史跡公園の巡回を行っている。また、老人のために庭の清掃を行う。老人ホームなどの訪問も行っている。

③ Rugby Middle Schoolのボランティア活動

(e) 老人ホーム訪問

美術部の生徒が老人ホームを訪問し、老人と一緒に水彩画を描く。また、生徒が影絵の人形劇を披露したりする。また、コーラス部の生徒が歌を聞かせる活動もしている。

(f) 教会でのボランティア活動

(g) 子どもたちへのクリスマスプレゼント

(h) Beta Clubの活動

優秀な生徒を集めたBeta Clubというものがある。彼らは例年学校で行われるクラフトフェアーで保護者がバザーをしているときに、小さな子どもたちの面倒をみる時間をもうけ、子どもを工作室などであずかる。Beta Clubは各学年のある。

(i) 募金活動

昨年ノースカロライナ東部で起きた洪水で被害を受けた人々のために募金を行った。また、実際に現地に行き、そこで復興活動などを行う。

(j) パンプキン飾りの販売

秋に玄関などの飾る紙のパンプキン飾りを生徒が作る。それを１ドルで売り、その収益金を団体に寄付する。

(k) Math-a-thon活動

これは生徒がマラソンのように続けて多くの数学の問題を解き、その努力の報酬をしてスポンサーからお金をいただく。そしてそのお金をガンなどで苦しむ子どもへ寄付するという活動である。

④現地調査の日程

日　時	場　　所	内　　容	関係者・関係機関 （所属・所在地・連絡先）
3 /28 (火) 7 ：30 8 ：00 9 ：00 13：30 14：10	Flat Rock Middle School	学校長、職員の紹介、生徒への紹介、日程打ち合わせ 施設見学、選択教科 Lisa's teamの授業見学（社会、理科、数学） 技能教科の見学 授業見学の感想、意見交換、明日の日程の確認	1028 West Blue Ridge Road, East Flat Rock, Nc28726-2669 Flat Rock Middle School
3 /29 (水) 8 ：15 13：30 15：00	同上	北灘中学校の学校紹介 日本の伝統的な玩具の紹介 生徒との意見交換（３クラスで実施） 選択教科の見学 本日の反省、意見交換、明日の日程の確認	同上
3 /30 (木) 8 ：15 13：30 15：00	同上	書写授業の実施 ・「日光」を書く ・自由選択を色紙に書く（３クラスで実施） 選択教科の見学 本日の反省、意見交換、明日の日程の確認	同上
3 /31 (金) 8 ：15 9 ：25 10：00 13：30 14：45 15：00	同上	国語（英語）授業の見学 折り紙（鶴の折り方）を教える 国語（英語）授業の見学 選択授業の見学 生徒との送別会 Lisa's teamの先生と意見交換 本日の反省	同上

(3) 研究結果と考察

お互いのボランティア活動を比較してみると、本校が取り組んでいる(a)、(b)のような奉仕活動はノースカロライナ２校（以下ＮＣ校）の(d)、(e)、(g)、(h)の活動とほぼ同様で共通点が多く見いだされる。生徒が子どもや老人のために掃除をしたり、藍染めをしたり、絵を描いたりと奉仕すべき現地へ赴き、そこで自分の体を使って人のために働くのである。また、本校の(c)やＮＣ校の(i)のような募金活動も共通して見られる。相違点としてＮＣ校の(j)、(k)のようなチャリティー活動が挙げられる。本校ではこのような活動の実施はしていない。特に(k)のような学習の努力の報酬としてお金を集め、それを寄付するというものは大変興味深い。単にお金を集めて回るだけではなく、自分たちの努力をお金に換えるということ、その点がおもしろいと思う。本校でも体育、文化面などの業績がたたえられ、それに対して賞状や賞品をいただいたりすることがあったが、それを寄付するということは思いつかなかった。また、そのような業績に対してお金が支払われるというケースは日本ではあまりないようにも思われる。

この結果から募金活動には２種類のものがあるように思われる。一つは自らが老人ホームなどに赴き、そこで奉仕活動を行うもの。つまり、自己の労働を他者のために役立てるものである。もう一つは、募金活動。ただし、単にお金を集めるものと学習の努力の報酬としてお金をもらい、それを寄付するという、自己の労働を金に換えてそれを必要としている機関へ寄付するものとがある。

この結果を見て目から鱗が落ちるような思いがした。わたしの今までの意識の中にボランティア活動は他者を思いやり、自己が働きかけることによって他者の役に立つことが必要だという思いがあった。他者を思いやるその気持ちが大切であるということからボランティア活動はお金に換算できるものではない、という思いがあった。生徒が「これだけ働いたらどれくらいバイト代もらえるかな」などと言ったときには注意をしたこともある。もちろん、この場合は労働の報酬が自己へ向いているので、ボランティアとは言えないが、ただ、「Math-a-ron活動」に見られるように生徒たちの労働がお金に換算され、それを寄付するという形も大切だと思うのである。もちろん、バザーをしてその収益金を募金したりするケースもある。実業高校などでは農作物を作り、それを販売したりしている。その収益金は募金などに回しているのだろうか。また、調査してみたい。話がそれたが、このように労働を現金に換えることで病気に苦しむ人など我々が活動しても直接的には役に立つことのできない人への働きかけができるという利点は大きい。ボランティアは無償だ、という意識がどうしても強くなりがちだが、労働を金に換えてもよいのではないか。逆にそうすることによって、活動の幅が広がるのではないかと思うのである。大切なのはそのお金をどう使うか、そこに他者を思いやる気持ちがあるかどうかだと思う。

今、本校のボランティア活動はこれまでの活動を充実させ、継続していく方針だが、このようなＮＣ２校のボランティア活動を紹介することによって生徒自身がボランティア活動のあり方について認識を深め、さらに活動の幅を広げていってくれることを期待したい。

(4) 今後の展望

今後、ＮＣ２校との交流に主眼をおき、次のような活動に取り組みたい。一つは本校が鳴門教育大生から学んだ藍染めを老人に教えてあげたように、今回わたしが彼らとともに行った書写や折り紙、日本の伝統的な玩具を使った遊びなどを老人ホーム訪問の際に実施してもらい、その反応などを聞いてみたい。また、他の日本の文化紹介などの生徒間で意見交換し、それを発表するのもよいのではないかと思う。逆にＮＣ２校から意見交換で学んだことをこちらのボランティア活動にも生かしていきたい。二つ目は両校同様なボランティア活動に取り組み、意見交換を行うというものだ。また、生徒の行動、反応の違いなども教師間で意見を交わしたい。

(5) おわりに

今回の研修に参加してたくさんのことを学んだ。ボランティア活動の比較から共通点が見いだされ、国を越えて人間として共通するものがあるということを実感できた。国際交流にはもちろん言語能力が必要になるが、それだけではなく、むしろ今回わたしが実感したようなお互いに共通性を見いだせるということが根底に必要だと思う。その点で、大変いい研修であったと思う。ただ、今回の研修では情報発信に力を入れすぎ、情報収集をおろそかにしてしまった。特にRugby

MS には訪問することもできなかった。幸いなことに夕食をともにしたりすることによって、情報交換もでき、帰国後、電子メールなどで情報収集ができた。関係の先生方に心より感謝申し上げる。最後にわたしの怠惰で、この報告書の提出が大幅に遅れ、多くの人に多大なる迷惑をおかけしたことを心からお詫び申し上げる。これからはこの研修の成果を上げるため、前項で述べた学校間の交流を深めていくことでご恩をお返ししたい。

Wilmington地区における研修の概要

大阪地区・Wilmington地区コーディネータ
大阪教育大学教育学部　助教授　　森　田　英　嗣

コーディネータからみたウィルミントン地区での研修の様子を簡単に紹介したい。

①　学校への訪問

1999年度ウィルミントン地区に滞在した教員は、小学校教員が2名、中学校教員が3名、高校教員が2名であった。各人は、2000年の3月27日（月）から30日（木）までの4日間、各配置校に滞在し、個々の交流プロジェクトを実施しつつ、参与観察をおこない、また教員へのインタビューを行っていった。小学校の教員は現地のVirginia Williamson Elementary School（幼稚園から小学校5年生まで）、Topsail Middle School（日本の小学校6年生から中学校2年生まで）、高等学校の教員は、Hoggard High SchoolおよびLaney High School（日本の中学校3年から高校3年まで）に配属された。また、3月31日（金）は、全員で上記以外の学校（Holly Tree Elementary School、Willston Middle School、New Hanover High School）を訪問し、Elementary SchoolからHigh Schoolまでの全体の様子を見学する機会を得た。これらの研修の計画、手配、実施にあたっては、ノースカロライナ大学ウィルミントン校のDr. Brad Walker先生にお世話になった。

月曜日から木曜日までの各学校への訪問について詳しくは各教員からの報告に譲りたいが、ここではコーディネーターとして気づいた点を一つ述べてみたい。それは、日米の教員間のコミュニケーションに関してである。

各学校には、通常、通訳が配置される。しかし本プロジェクトでは、通訳に依存せず、自力でコミュニケーションをとることも交流の重要な要素と考えられている。もちろん、最初は遠慮がちな姿も見られるが、2，3日すぎると、自分から冗談を言う姿などもみられるようになる。また、各学校では、日本からの教員を迎えると、レセプション・パーティが開かれることも多い。そこには、地域の人たちや教育委員なども招かれることがあった。しかしその雰囲気は必ずしもフォーマルというわけでなく、おなじ食べ物を食べ、おなじ時間を共有していくうちに、次第に緊張感も解け、身振り手振りを交えて、うまくコミュニケーションする姿が見られるようになった。研修の全日程を通して、コミュニケーションが全ての教員のもっとも大きな問題であり続けるのは、事実である。しかし、このようにしてコミュニケーションのギャップが急速に埋まるのは、教員として互いに知りたいこと、話したいことをたくさん持っていること、教員として互いに尊敬・尊重し合う関係がコミュニケーションの基盤にあることなどのためだと思われた。親密度を増していくプロセスは、みていて実に不思議で、これは、外国語教育に示唆を与え得る事実ではないかとも思われたほどである。

教員が各学校に訪問している間、日米双方のコーディネーターは、個人プロジェクトがうまくいくように配慮しつつ、各学校を回りながら、問題を解決したり、計画の調整をしたりしている。さらに、日本からのコーディネーターは、学校訪問を行った5日間の毎夕方、その日に各教員が観察したこと、考えたことを共有するためのリフレクション・ミーティングを主催した。この中で、個別の経験を意味づけたり、一緒に考えたり、次の日にすることを提案してみたりしながら、教員の研修、交流を組織化していくよう、配慮している（このミーティングの内容は、全て記録し、後の報告の資料として活用する予定にしている）。

②　ホームスティ

4月1日（土）から2日（日）にかけて、学校への訪問の5日間を終えた教員は、教師の家族をホストファミリーとした1泊のホームスティを行った。ここでは、生活や、コミュニティの観察を通して、より立体的に学校教育を知ることが目的である。このプログラムには、筆者などのコーディネーターも参加した。ちなみに筆者は参加した中学校の教員とともに高等学校教員のお宅にお邪魔した。パートナーが日本企業を相手に仕事を行っている方々で、夫婦共々日本に興味をもつご家族であった。

ホームスティでは、基本的に、通訳がいない。どの教員も体当たりで、コミュニケーションをしながら、交流を深めていった。ホストファミリーは、このプロジェクトで来日した教師、来日する予定の教師などで、日本への興味も強い。そのためか、ここでも、コミュニケーションは、工夫次第で楽しく行うことができるという経験をすることができた。

③　サマリー会議

ホームスティの後、州都のローリー（Raleigh）に移動し、サマリー会議を行った。サマリー会議は、3つの地域に散らばっていた訪米教員が一堂に会する会議であり、ホストしてくれた米国側の教員、このプロジェクトで来日した教員、来日予定の教員など、関係者全てに案内が出された。

学校経営

・学校の仕事が細分化されていた。

カウンセラー、ソーシャル・ワーカーなど専門が細分化されている。それらの人たちがチームワークをもって子どもを支援していた。

校長がリーダーシップをとっている。校長だけでなく、教頭も生徒指導を行っている。地域、ボランティアが学校教育、とりわけ教科教育に参加していた。

カリキュラム

・子どもはコンピュータを駆使していた。全ての教科でコンピュータが使われていた。図書館、メディアスペシャリストも充実していた。

しつけないし規律 (Discipline)

・アメリカは日本以上に騒がしいのだと思っていたが、とても子どもが統制されていた。

・アカウンタビリティが基盤になっていた。決まり事を共通理解させた上で懲罰システムが導入されていた。行動の善し悪しがはっきりしていた。

・学校と家庭のしつけの分担が明確で、日本ではしつけのかなりの部分が学校に任されているように思えた。

・学校は本来開かれたものであるべきだと思った。

会議の目的は、3つの地域で研修してきた日本人教員自身がそれぞれの地域、学校で何を考え学んだかをまとめ、振り返ることが第一の目的だが、それを通して、ホストしてくれた米国人教員の側にも訪米の成果を示すことを視野に入れている。この会議の中で、Wilmington地区に派遣された教員は、概略次のように三つの視点からその経験をまとめていた。

以上、簡単にウィルミントン地区への訪問を振り返った。

グローバルパートナーシップ学校プロジェクト参加レポート
(2000年3月25日－4月6日)

大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校　教諭　　多　田　和　彦

○個人プロジェクトの概要

1　はじめに

私の勤める大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校は、大阪市のほぼ中心である阿倍野区に位置している。ＪＲ天王寺・近鉄阿部野橋駅・大阪市営地下鉄（谷町線・御堂筋線）天王寺駅から徒歩５分という立地条件に恵まれたビルと鉄道に囲まれた学校である。

本校は教育大学教育学部の附属小学校として、教育実習生受け入れを中心にした教員養成期間としての役割と、教科及び道徳における小学校教育研究機関としての役割を担っている。

そこで、今回のプログラム参加に際して個人プロジェクトの提案を上記の２点を基に記すこととする。

2　教員養成機関としての立場から

先にも述べたように、本校は教員養成過程を有する大学附属小学校としての任務を帯びている。年間に教育実習生受け入れ期間があり、１回あたり平均60名の学生を全18学級で受け入れている。私自身が担当教官となる実習生も年間10名弱となる。

日本とアメリカとの教員養成や教員資格の違いはあるものの、指導者育成としての観点からアメリカの小学校教員が受けてきた教育や研修プログラムを現地の教員との交流によって学んでくることは、今後の本校のあり方や私自身の指導方法を見つめ直す視点として参考になるものと考える。

そこで、今回訪問予定の各学校で、可能な限り現地教員とのインタビューによって以下の２点を確かめてみたい。

ア．教職経験10年未満の教員に対して

①大学等の養成期間で学んだことは現在の教育活動に生かされているか。

②現在校内及び他の機関による研修プログラムを受けているか。また、受けているのならば、それによって、直接指導に生かすことができたか。

イ．教職経験10年以上の教員に対して

①現在の自分自身の教育活動の中で疑問を感じることはあるか。

②昇級や昇進といったステップアップに興味はあるか。

ということを聞き取っていきたいと考えている。

いずれの項目においても、できるかぎり簡潔に質問をし、日常の指導を踏まえた回答が得られることを期待しているが、子どもとのやりとりを観察することで先入観を持ったり、条件付きの回答にならないように注意したいと考えた。「見たまま感じたまま」を大切にしたい。

3　本校の研究活動にともなって

本校では、「個が生きる学校」を教育目標とし、過去10年間、下記のテーマのもとに研究活動に取り組んできた。

1988年	「情報活用能力を育てる授業」
1989年	「情報活用能力を育てる授業Ⅱ」
1989～90年	「どの子も個性を発揮して、主体的に学習する授業の創造」
1991～92年	「子どもの個性を生かす授業の創造」
1992～93年	「新しい学力観に立った子どもの個性を生かす授業の創造
1993～95年	「新しい評価観に立った子どもの個性を生かす授業の創造」－指導と評価の一体化を目指して－
1995～97年	「新しい評価観に立った子どもの個性を生かす授業の創造」－指導と評価の一体化を目指してⅡ
1997～現在	「コミュニケーションが作る学習」

いずれの研究にも「主体性」「個性」と言うキーワードと「授業の創造」がうたわれているわけであるが、そもそもわれわれ教師が日常の指導の中で子どもたちと向き合ったときには、いかに一人ひとりの子どもに合わせた指導や対応がきめ細かくできているかが、教師の力量として問われるのではないだろうか。

アメリカは、パーソナリティーの国だと考えている

が、教室で一斉授業を行っていくことにおいては、日本もアメリカも同じ事だと考える。そうした状況の中で、子どもたちのパーソナリティー（個性・主体性）をどの様に生かし、その上で新しい教育実践をどの様に創造しているのだろうか。

私自身が現在継続研究中の「コミュニケーションが作る学習」においては以下に示す学習の中での位置づけをもとに、「何を」「どう」コミュニケーションさせるのかといったことを中心に、アメリカで行われている授業観察を通して比較検討していきたいと考えている。

以下、本校1998年研究紀要より抜粋

－　中　　略　－

コミュニケーションが作る学習への手だて

授業においては、よりよいコミュニケーションによって、教科等の目標達成によりせまることができる。そこで、授業を行うにあたり、学習目標の達成によりせまるためのコミュニケーションとして、次のような手だてを考えた。

①　位置づけ

学習課程において、いつ、どこで、どのようなコミュニケーションを行えば、学習目標の達成によりせまることができるかを、指導計画全体や1時間の展開の中で考えておく必要がある。例えば、導入時に学習課題をつかむ場面や、一人一人の思いや考えなどを全体の場で練り上げようとする場面のほか、学習の振り返りの場面での位置づけなど、学習課程におけるコミュニケーションの位置づけを工夫する必要がある。

②　学習形態

学習形態については、個人や一斉のほか、一対一、小集団などの様々なグルーピングが考えられる。個々の思いや考えなどが深められ新たなものへと発展していくようにするために、小集団での学習を行うなど、目的に応じて学習形態を選択・工夫していく必要がある。

③　学習材

個人内コミュニケーションをより確かなものにするためや、対人コミュニケーションを始めたり深めたりするために、ワークシートや学習カードの他に、コンピュータ機器の活用や外部人材の登用、施設の活用等について工夫していくことも大切である。

これらの学習の手だての前提条件として、子どもと指導者とのコミュニケーションを大切にし、望ましい集団の雰囲気を維持・発展させていかなければならない。また、よりよいコミュニケーションのために、子ども自身に身につけておくべきことなどがあることは言うまでもない。

－　以 下 略　－

また、私自身の研究教科である体育科でも、近年の研究におけるキーワードは「かかわり」である。そこで、今回のプロジェクトにおいても私自身が直接指導に当たることで実践の交流を図っていきたいと考える。そこで特に重視したいことは話し言葉によるコミュニケーションよりも、実際の動きにつながる身体表現やスキルアップのためのトレーニングについて触れることができれば幸いであると考える。

○個人プロジェクトの成果と課題

教員養成機関としての立場から

インタビュー対象教員数　27名（女性25名・男性２名）

ア．教職経験10年未満の教員に対して（16名：女性15名・男性１名）

①大学等の養成期間で学んだことは現在の教育活動に生かされているか。

YES：15名

NO　：１名

皆、口をそろえたように、YESを連発していた。実際に、「大学時代にかなり勉強したと。」発言する教師が多かった。

②現在校内及び他の機関による研修プログラムを受けているか。また、受けているのならば、それによって、直接指導に生かすことができたか。

YES：16名

NO　：０名

「大学の夜間授業」に参加している」「郡の学校運営研修プログラムに参加している」全校職員対象に月間１回のペースで指導法研修を受けている」など

イ．教職経験10年以上の教員に対して（11名：女性10名・男性１名）

①現在の自分自身の教育活動の中で疑問を感じる

ことはあるか。あれば、その中身にも触れてみたい。

YES：９名

NO　：２名

「最近特に学力向上ばかりに目が向いている」「個人的な問題を抱えた子供を持ったときにカウンセラー任せになっている」「しなければならないことがあるのに年齢と共に身体が動かなくなっている」など

②昇級や昇進といったステップアップに興味はあるか。

YES：10名

NO　：１名

訪問したどこの学校でも行っていた教師対象の表彰やコンテストはすばらしいシステムだと考えているのだろうか?

本校の研究活動にともなって

①　授業観察を通して

アメリカの小学校をのぞき見て、そのしつけの厳しさに驚かされた。WILIAMSON の場合も HOLLY TREEの場合も１学級が教室を移動するときには全員が１列縦隊になって廊下の右側を歩いている。授業中(指導者が講義している)時には全くと言っていいほど私語がない。ところが、3rd 以上の学年では「何か質問は?」「疑問点は?」という指導者の言葉をかわきりに、どんどん挙手があり学習が活気づく。話す・聞くの基本原則が見事なまでに守られている。しかし、子どもたちに担任と一体となって学級を盛り上げていくという雰囲気が希薄である。聞けば、行事らしい行事がほとんどなく、行事があっても希望者のみが参加するシステムになっているものがほとんどだという。学校は学力アップを目指す場所ではあるのだろうが、それだけでよいのだろうか。

音楽、体育、美術の授業では専科の教師が授業を行っていた。子どもたちの表情が教室で見せていたものとは一変したことに気が付いた。アメリカの子どもたちの自己表現力のすばらしさに数多く触れることができたと感じる。VTRやデジタル写真にそのすばらしい表情が数多く残すことができたのは私にとっての大きな財産だと考える。(フォトアルバムレポート参照)

②　授業実践を行って

WILIAMSONでの体育学習の実践は大変貴重な体験であった。合計４学年４時間の授業を実践することができたわけであるが、言葉が通じないと言うハンディキャップはほとんど感じることがなかった。逆に、私も子どもたちも互いを思いやりながら「いかに楽しむか」に没頭できたような気がしている。

「運動を楽しむ」ことが体育学習の原点であるはずなのに、これまでの私自身の実践の底の浅さを思い知らされたような気がする。私自身が結果を考え、本当に自らが楽しんで学習を創造できていなかったように思う。

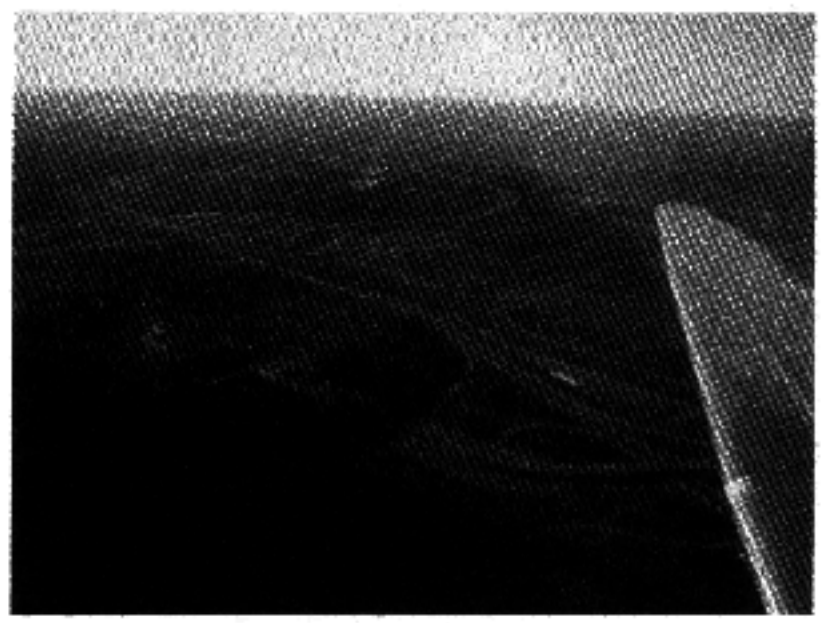
VTRに授業記録を収めてきたが、いつもの自分よりも元気はつらつとしている事に気が付く。これからもこうありたいと思った。

○ジャーナルキーピング（フォトアルバムレポート）

平成12年３月25日
直前研修会　新大阪：コロナホテル

各サイト毎に自己紹介
・Western Carolina
・North Carolina at Wilmington
・East Carolina

経由地：デトロイト空港
国際空港ですが時期がそうさせたのか?
混雑もなく空港内の乗り継ぎも安心



デトロイト郊外（機上より）
延々と続く道路が印象的

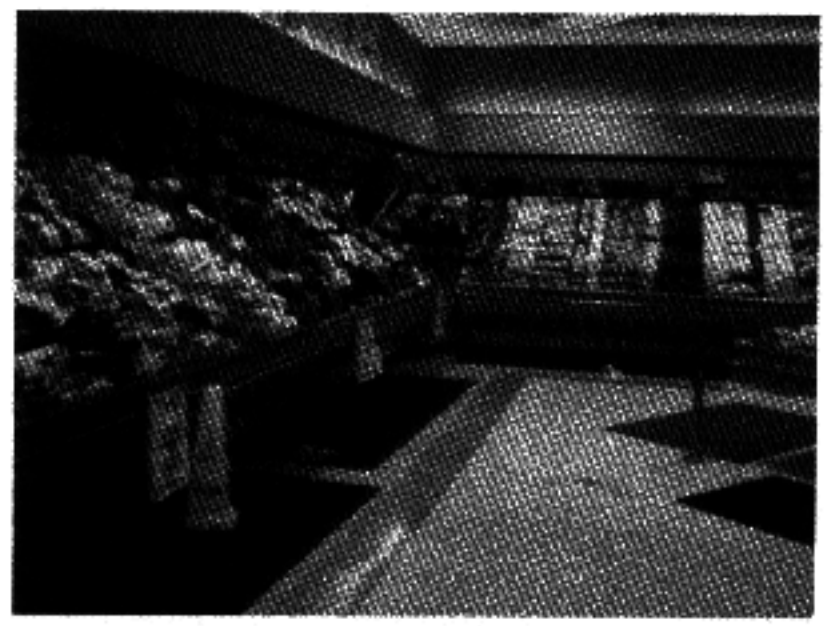
roleignに到着
先ずは少し遅めの夕食
マクドナルドにて

見慣れないメニュー
ハンバーガーだけでなくピタサラダが結構いける
量も日本人向きです

Wilmingtonへ向かう途中のパーキングエリア
思ったよりも、整備が行き届いている
自販機コーナーにはお菓子がいっぱい!

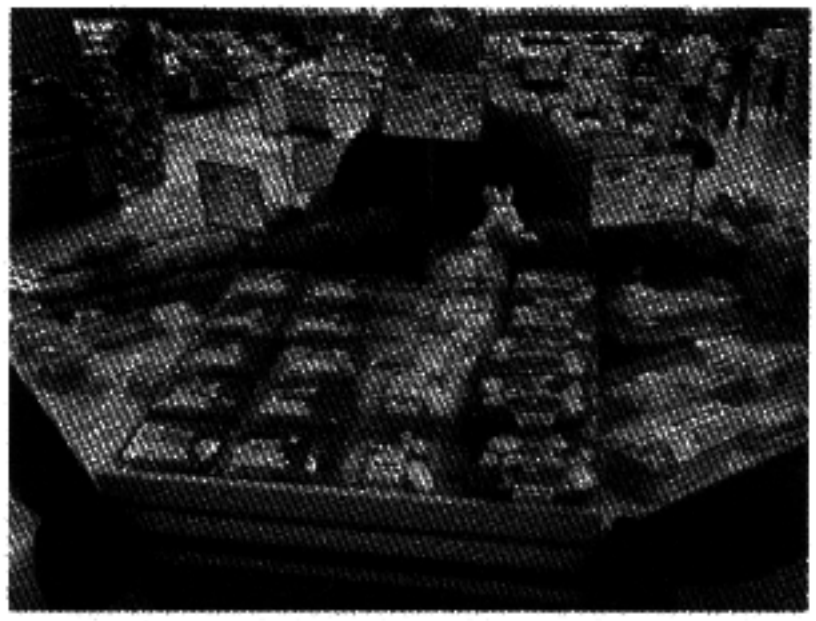
フリーウエイの途中にはあちらこちらに
ドライブインらしきものが点在
日本同様、ファーストフード店が固まって
営業していました

Wilmington到着
最初に訪れたのがショッピングセンター
10 : 00PM

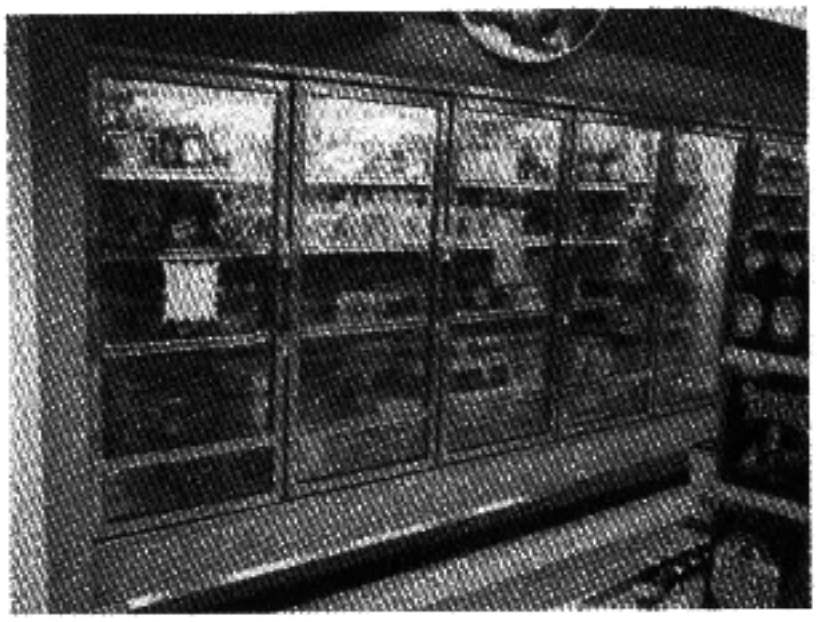


生鮮食料品も豊富
激安! 激安!

陳列方法は日本のものとは少し違うように感じる
何が…?



フルーツと同じ棚の裏側には、色とりどりの
クッキーの詰め合わせがありました



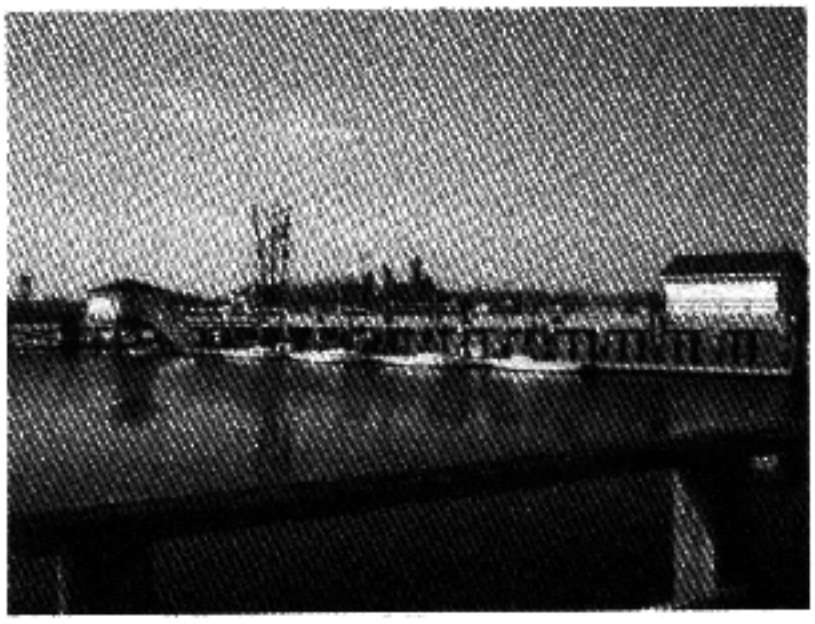
保存食は数え切れない種類が用意されていました
野菜、果物、シリアルフード、ドリンク類
アイスクリームの種類も豊富です

牛乳も種類が豊富
甘いものから、低脂肪のものまで
不思議なことですが…パッケージに表示が
全くない大ボトルがよく売れていました

シリアルフードも盛りだくさん
電子レンジで作るポップコーンなども種類が豊富です

COAST LINE INN on the CAPE FEAR RIVER
503 Nutt St. Wilmington, NC 28401
居心地のよいホテルです

平成12年３月26日　ホテル前にて
歴史を感じるたたずまい



ホテルの裏側はケープフィアー川に面しています
桟橋やウッドテラスがリバーサイドを演出しています

ホテルの表玄関
元々は内陸部の資源を鉄道輸送していた
水運との連結部に当たるらしい

あちらこちらにサクラが満開でした
（日本よりは２週間ほど早め）

レンガ造りのこぢんまりした外観です
スタッフは少な目ですが、とてもフレンドリー

機関車のヘッドマークを模したホテルの看板です

Wilmingtonの街中はウイークエンドということも
あってか、大変静かです
アイリッシュスタイルのレストランにて昼食

ホテルの裏側
ケープフィアー川の対岸にU. S. S. NORTH
CALORINA BATTLESHIP MEMORIAL
という退役戦艦の展示公園があります

市内から30分ほど車で走ると大西洋!!!
ペリカンが群をなして飛び交っていました

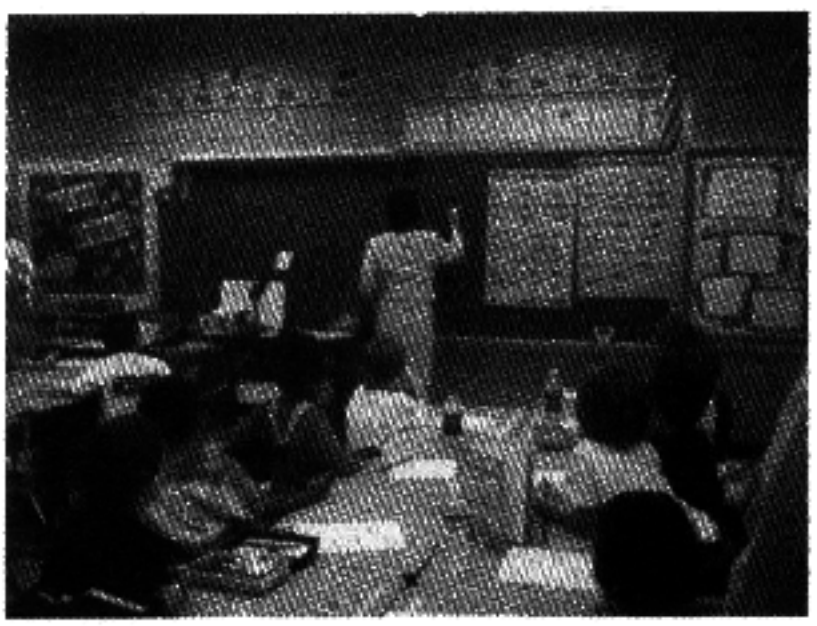
延々と続く砂浜
ハリケーンの被害で有名な大桟橋が
最近壊れてしまったとか

ホテル前に展示されていた機関車

市内の通りに面して数多くサクラが
植えられていました
景色はそこだけが日本のようです

平成12年３月27日
Verjinia Willianson Erementary School
本日より５日間通うことになっている
朝から全校集会を開いてくれた

驚いたことに開講一周年を迎えようとしている
新しい学校だが全校集会はこの日が始めて
集合に40分もかかっていた



広島エリアから同行した西谷恵美子先生の授業
紙芝居に子どもたちは見入っていた
反応は小さかった…

低学年教室前の廊下
地球環境を考えるきっかけとなるように
熱帯雨林を色画用紙で再現していた

メディアセンター（図書館、コンピュータ教室）の
裏側通路を高学年の子どもたちがペイントしていた
これも、環境教育の一環だと説明を受けた

広々としたランチルーム
11：30から13：30の間にKから5thまで
25学級の子どもたちが交代で利用する

一人ひとりがＩＤカードを持っていて
カフェテリア形式で好きなメニューを選択し
利用額を１か月毎に精算するシステムになっている

中にはランチボックスを持ってきて、
デザートだけを注文している子どももいる
「この学校のランチは、美味しいか?」と訪ねると
「マクドナルドには負けるよ!」と返ってきた